

(7) 健康状態並に育雛率

区名	週別	開始時	雛 死						計	終了時羽数	育雛率
			1週	2週	3週	4週	5週	6週			
対照区		40	0	0	0	0	0	0	0	40	100
抗生物質区		40	1	0	1	0	0	0	2	38	95
テレフタル酸区		40	2	1	0	0	0	0	3	37	93

育雛中の雛死は1週以内のものは卵黄未消化によるものでありその他は圧死等の事故死であつて育雛率の差異は飼料によるものとは思われな  
い。

4. 要 約

(1) 発育成績

抗生物質並にテレフタル酸の無添加の対照区の増体量指数100に比  
較して抗生物質区は106、テレフタル酸区は108と夫々優れた成績を示  
したが試験終了時の増体量平均値について統計処理の結果各区の間に有  
意差は認められなかった。

(2) 飼料要求率

積算飼料要求率について各区の間に大差は認めない。

(3) 雛の健康状態

雛の活力、糞便、育雛率等各区の間に大差を認めない。

以上の成績よりテレフタル酸(ナトリウム塩として99.5%以上のもの)  
を基礎飼料中に0.38%添加することによる雛の成長促進効果は増体量に  
ついて無添加区100に対し抗生物質区106、テレフタル酸108とややよ  
い成績を示したが統計処理の結果明らかなる有意差は認められないが本試験  
のみにて結論は下せないのて尙追試の必要がある。

18. 雛の成長に及ぼすテレフタル酸の効果について(第2回)

名 倉 清 一 井 崎 金 二  
殿 内 正 芳 清 水 明 良

1. はじめに

本試験は今春期にテトラサイクリン系抗生物質とテレフタル酸を各々単  
独に添加した飼料について成長試験を行った結果無添加区が対照区よりは  
優れた増体量を示したが統計処理の結果は有意差を認めなかった。今回は

養期試験の自試として添加量を若干かえて行った。

## 2. 試験方法

(1) 試験雞 白色レグホーン種初産雌雄160羽を次の4区に分けた。

(2) 試験区分

区 分	添 加 量	
	テレフタル酸	抗生物質
試験1区	0	0
" 2区	0.05	0
" 3区	0.1	0
" 4区	0	ホロファック 10 0.05

(3) 試験期間 昭和37年8月25日より10月6日まで6週間

(4) 給与飼料

品名	區別	試験1区	" 2区	" 3区	" 4区
とうもろこし		39	"	"	"
小 麦		12	"	"	"
ふ す ま		10	"	"	"
脱 脂 米 糠		10.12	"	"	"
大 豆 粕		14	10.07	10.02	10.07
魚 粕		10	"	"	"
アルファルファー		2	"	"	"
食 塩		0.45	"	"	"
炭酸カルシウム		2	"	"	"
ま の 他		0.43	"	"	"
抗 生 物 質		-	-	-	0.05
テレフタル酸		-	0.05	0.1	-
計		100	100	100	100

その他内訳—ビタミンA,D剤 0.05 微量無機物 0.1 ビタミンB剤 0.05

第2燐酸カルシウム 0.25 コフシジウム症予防剤 0.03

(5) 供試品

テレフタル酸 — 川崎化成工業KK製品の純度98.0%以上のもの

抗生物質 — 武内科学飼料KK製品のオーロファック10を使用

1kg中クロール、テトラサイクリン22g含有

(6) 飼養管理

使用育雛器は下記のものを使用し飼料は上記配合飼料を不断給与とす

し毎週末飼料の残量を秤量し各区の摂取量を測定し観察は無給与とした。体重測定は毎週末個体別に測定しその他一般管理は当場の慣例により実施した。

### 使用育雛器

期 間	育 雛 器
飼 村 ~ 14日	バッテリー育雛器 温源付
14日 ~ 24日	" 温源なし
24日 ~ 42日	中雛ケージ

## 3. 試験成績

### (1) 発育成績

區別	週別	開始時	1週末						増体重
			1週末	2 "	3 "	4 "	5 "	6 "	
試験1区	体重	34	71	126	202	294	409	513	479
	指数	100	100	100	100	100	100	100	100
" 2区	体重	34	72	130	208	301	418	525	491
	指数	100	101	103	103	102	102	102	103
" 3区	体重	34	73	130	206	297	408	527	493
	指数	100	103	104	102	100	100	103	103
" 4区	体重	34	73	130	203	301	421	525	491
	指数	100	103	103	101	102	103	102	103

### (2) 飼料の摂取量並に飼料要求率

區別	週別	開始時 羽数	死						終了時 羽数	育雛率	
			1週	2 "	3 "	4 "	5 "	6 "			計
試験1区		40	0	0	1	0	0	0	1	39	97.5
" 2区		40	0	0	0	0	1	0	1	39	97.5
" 3区		40	1	0	1	1	0	1	4	36	90.0
" 4区		40	1	0	0	0	1	0	2	38	95.0

雛死は1週以内のもの及び卵の未消化によるものその他は圧死、事故死である。

## 4. 要 約

### (1) 発育成績

テレフタル酸並に抗生物質の無添加区の試験1区の終了時増体重指数100と比較してテレフタル酸0.05%添加の試験2区、0.1%添加の試

験3区、オーロファック 10 を 0.05% 添加の試験4区の増体率指数は 103 で夫々試験1区よりは増体に良好な傾向にあるも統計処理の結果有意差は認められない。

## (2) 飼料要求率

積算飼料要求率について、各区共大差を認めない。

## (3) 雛の健康状態

育雛率に若干の差はあるが繁殖雛の原因は卵黄未消化、早故死が大部分であつて飼料による差とは考えられない、活力、糞便飼料の嗜好等にも各区の間に差異を認めない。

以上の成績よりテレフタル酸(ナトリウム塩として 99.5% 以上のもの)を基礎飼料に 0.05% 0.1% 添加することにより無添加区よりは発育、飼料要求率に若干良好な傾向にあるがその差は統計的に有意差は認められない、オーロファック 10 (クロールテトロサイクリン/kg 中に 22g 含有) 0.05% 区とも同程度であり両者の間に大差は認められない。

# 19. ダイナファックの雛に対する給与試験

名 倉 清 一 井 崎 金 二  
殿 内 正 芳 清 水 明 良

## 1. 目 的

第4級アンモニウム塩の雛に対する成長促進効果は海外文献により散見されるところであるが、わが国においては、この利用が実用的に有利であるかどうかについては実用的試験例がないので本試験を実施した。

## 2. 試験方法

- (1) 供試雛 単冠白色レグホーン種系統向交配初産雛雄ノ区 40 羽
- (2) 供試品 ダイナファック (トリメチルアンモニウム、ステアレート 20% 含有)
- (3) 試験期間 昭和37年3月28日より5月9日まで6週間
- (4) 試験区分並に供試飼料配合割合